

誤帰属過程における認知の 顕在性-潜在性

外 山 みどり

誤帰属 (misattribution) とは、文字通り誤った帰属、つまり真の原因でないものに原因を帰することを指す。本来の語義からいえば、この表現はかなり広範囲の現象に適用されてしかるべきであるが、一般にこの語が用いられるのは自己帰属に限定されており、自分が感じている生理的な喚起や、既知感、親近感、知覚的流暢性などの内的・主観的感覚の原因を、本来の原因ではない別の要因に帰するという現象に対して適用されている。一方、類似の表現である「帰属のエラー (attribution error)」という語は、推論過程における判断の誤り、他者帰属や自然現象などに対する帰属判断全般についての認知的バイアスを指すものとして用いられており、両者の使用はかなり明確に区別されている。本論で扱う誤帰属は、前者、すなわち自己の内的状態に対する帰属における誤った判断およびそれに関連する推論の問題であることを最初に明確にしておきたい。

1. 誤帰属研究の歴史的展開

誤帰属の研究は、1960年代以降、Schachterの情動二要因理論 (Schachter, S. 1964) に関連する情動帰属の問題の中で始まった。ただし初期の研究では、誤帰属という語は用いられておらず、以下に挙げるような代表的な初期の誤帰属研究では、タイトルにも本文中にも、この表現が

見いだせないものが多い。また Schachter の情動二要因理論の中でも、帰属理論への言及はなされていない。情動二要因理論あるいは Bem (1967) の自己知覚理論 (self-perception theory) が、自己帰属の理論として帰属研究という範疇の中に分類されるようになったのは、後のことである。

初期の誤帰属研究、つまり自己の情動認知における誤帰属の研究は、1960年代から1980年代にかけてさかんに行われたが、1980年代末から1990年代にかけて、これとはやや異なった種類の誤帰属研究が登場することになる。これは認知心理学の研究者が、より広範な現象に対して誤帰属という用語を適用し始めたことに伴うもので、単純接触効果、記憶のソースモニタリングの誤り、プライミング効果、有名性効果など多くの認知関連の現象が誤帰属の観点から解釈されるようになり、これによって誤帰属研究の範囲は大きく広がることになった。もちろん、誤帰属という観点からこれらの現象を説明する立場は1つの解釈であり、唯一絶対の説明ではないが、真の原因が不明瞭な既知感、親近感、知覚的流暢性などによって、当面の判断が影響を受ける広範な現象や、原因の取り違えや混同などの事例を統一的に説明することができる点で有効な視点である。

心理学関係の文献検索ソフト PsycINFO を用いて、「誤帰属」がタイトルや要約中のキーワードに含まれる研究を検索すると、もっとも早く“misattribution”という語が用いられたのは1969年の Ross らの研究 (Ross, Rodin & Zimbardo, 1969) であり、その後、2012年9月現在まで計609件にのぼる (図1, 参照)。1970年代～1980年代にかけて、ほぼ年に10編程度で推移し、その後、1990年代半ばから増加し始め、最近数年間では、年35～40編の論文が出版されている。上に述べたような2種類の誤帰属研究が、2つの山の形で明確に見分けられるわけではないが、1980年代末までの研究は、ほぼ情動帰属の系列のもので、その後、認知心理学的誤帰属研究と情動の誤帰属関連の研究が混ざってくる。1990年代から2000年代にかけての誤帰属研究の増加は、認知心理学

的な研究の増加に対応するものと見られる。前述の通り、初期の研究では misattribution という表現が使われておらず、その後も、直接的にはこの言葉をキーワードに含まない研究はかなりある。その点では、実質的な誤帰属研究の数はこれよりも多いと推定される。ただし逆に、応用的な研究の中で異なった意味の misattribution が用いられた例、別の文脈で同じ言葉が使われた例もないことはない。最近の数年で研究数が顕著に増加している背景には、Payne らが開発した AMP (Affect Misattribution Procedure) と呼ばれる潜在的な態度測定の手法 (Payne et al., 2005) が広く使われるようになったという事情もあるが、誤帰属の研究は現在も活況を呈している。

本論文のねらいは、誤帰属研究の歴史を振り返りながら、誤帰属における推論の顕在性-潜在性の問題を検討することである。詳しくは後述するが、誤帰属に関しては、真の原因、それが引き起こした内的・主観的事象、それに対する因果推論、そしてその結果として生じる判断や情動、などの諸要素が存在する。誤帰属過程の各段階が、どの程度、顕在的・意識的であるか、逆にどの程度、潜在的・無自覚的であるかを再検討したい。

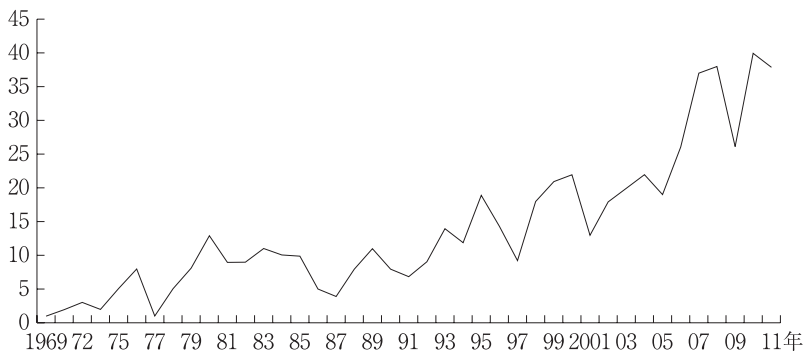


図1 誤帰属研究の件数の推移 (PsycINFO による検索結果)

2. 初期の誤帰属研究—情動の誤帰属

情動二要因理論

上述の通り、初期の誤帰属研究の多くは、Schachter の情動二要因理論（1964）と関連したものである。情動の二要因理論とは、喜び、悲しみ、怒りなどのような情動を経験するためには、生理的な喚起（physiological arousal）と、情動と関連する認知という2つの要素が必要であると主張する理論である。Schachter は、過去の情動理論を検討した上で、情動を生じるためには生理的喚起だけでは不十分であると述べ、さらに生理的喚起状態にありながら、それに対する直接の説明をもたない人は、自分の状態を理解し、何らかのラベルづけをしようという評価欲求をもつと仮定する。その際に利用されるのが認知であり、状況の認知的な側面によって、ある場合には喜び、別の場合には怒りというような多様な情動的ラベルを付与される可能性を指摘している。この主張の背後には、同じ生理的喚起状態に対して多様な解釈が可能であるというような可塑性、変幻性が前提とされている。

情動の誤帰属の研究例

情動二要因理論の根拠となっているのは、理論提出に先立って行われた Schachter と Singer の有名な実験（Schachter & Singer, 1962）である。この実験では、ビタミンが視覚に与える影響を調べるためと称して、実験参加者たちに薬剤を注射するが、この薬剤は実はエピネフリンであり、この注射を受けた参加者たちは心拍数の増加や体温の上昇などの生理的喚起状態を経験した。注射の後、参加者たちは、怒りまたは高揚気分（euphoria）のどちらかを誘発するような場面に置かれた。すると、「注射の副作用」についての適切な情報を与えられなかった参加者たちは、置かれた状況に対応して、ある場面では怒り、別の場面では高揚気分の徴候

を示した。これは、自分の感じている生理的喚起状態を周囲の状況や刺激によって説明し、原因を誤った対象に帰属したことを示す。しかし、同じようにエピネフリンの注射を受け、その後に情動を誘導するような状況に置かれた参加者でも、注射の効果についての適切な説明を与えられた場合には、情動的な徴候を示さなかった。この条件では、二要因のうち認知的ラベルづけの要素が欠けていたということになる。またエピネフリンではなく、生理食塩水を注射された統制条件の参加者もあまり情動的にならなかった。この条件については、2つの要因のうち、生理的喚起の条件が欠落していることになる。結果を要約すると、生理的な喚起症状を経験しているにもかかわらず、その原因が不明瞭な場合、現実には薬剤の注射によって生じた生理的状态を、別の社会的・状況的要因から説明し、それによって対応した情動を経験することがあるという事実が示された。これは自己の情動の認知における誤帰属の一例である。Schachterの情動二要因理論から解釈するならば、生理的喚起と認知的要因（情動に関連する認知）の両者が存在する場合に情動が生じ、一方で欠けている場合には情動は生じないということになる。

Schachter & Singerの実験は、薬剤の注射という外在的な要因によってもたらされた生理的喚起状態から情動が生じたという事例である。換言すれば、情動とは無関連な原因から生じた状態を、情動的に解釈したという種類の誤帰属といえる。これは情動関連の誤帰属の中で第1のタイプに分類される。

これに対して、情動によって生じた生理的喚起状態を、情動とは無関連な刺激に帰属するというタイプの誤帰属も存在する。これは第2のタイプの誤帰属である。たとえばStorms & Nisbett (1970)は、不眠傾向のある大学生を参加者として募集し、就寝前に薬剤を飲むように指示した。その薬剤は現実には偽薬 (placebo) であり、何の薬効ももたないのであるが、ある条件の参加者には、薬は体温を上昇させ、心拍数を増加させるなどの喚起症状を生じると予告し、別の条件の参加者には、薬は体温を低下

させ、心拍数を減らすなどの鎮静作用を生じると予告した。通常の偽薬効果または暗示の効果から考えれば、鎮静作用があると言われた場合の方が早く寝つけると予想されるかもしれないが、この実験の結果では、喚起作用を予告された条件の参加者の方が、鎮静作用を予告された条件の参加者よりも早く寝つくという傾向が見いだされている。これは、不眠傾向のある参加者が就寝時に感じる興奮状態を薬の喚起作用に帰属した場合、自己への帰属の度合いが低下することによって不眠症状が改善されたものと解釈されている。

これと同じ種類の誤帰属を扱った研究の例としては、電気ショックに対する恐怖に起因する生理的喚起を無関連な騒音に帰属するよう誘導することによって、恐怖を減じることに成功した Ross らの研究 (Ross, et al., 1969) を挙げることができる。ちなみに、この研究は、タイトルに misattribution の語が現れた最初の論文である。これらの研究で明らかにされた種類の誤帰属は、本来、不安や恐怖のような情動によって生じた喚起症状を無関連な外部刺激に帰属させることによって、不適応的な症状を軽減することができるという意味で、臨床的応用の価値があると考えられ、一時期は“帰属療法 (attribution therapy)”の可能性が追究された。ただし現実には、自然に発生した生理的喚起を、無関連な外部要因に帰属するよう誘導する操作には多くの場合無理があり、長期的な効果を期待するのは難しいことが次第に明らかになった。そこで帰属の臨床的応用としては、この種の方向の帰属療法を目指すのではなく、無気力などにつながる不適応的な帰属スタイルを改め、より適応的、建設的な帰属をするように訓練する方法を考案する方向に研究が進展した (Dweck, 1975 など)。

このほかに情動関連の誤帰属としては、2種類の原因による生理的喚起が併存する場合に、その両者を混同するという性格の現象もある。2種類の原因によって生理的喚起が生じた場合は、1つの原因による通常の喚起状態よりも強度が強くなるが、これが十分認識されず、一方の原因のみに帰属される結果として強い情動が生じる。この種の事例については、

Zillmann が興奮転移 (excitation transfer) 理論を提唱している (Zillmann, 1978)。この理論によれば、時間的に先行する刺激によって交感神経系の喚起を経験していながら、その作用に気づいていない人に第2の刺激を与えると、以前の興奮の残余が第2の刺激に対する興奮反応と不可分に結びついて情動を強めると予測されている。このような仮説を裏付けるものとして、Zillmann らの研究 (Zillmann, Katcher & Milavsky, 1972) では、他人から中傷を受けて怒りを誘発された後、激しい運動をした参加者は軽い作業をした人よりも、後のセッションで相手への強い報復反応を示すことが見出された。また、揺れる吊り橋の上で、魅力的な女性インタビュアーと出会った男性が、普通の堅固な橋の上で同じインタビュアーに出会った男性よりも、女性に対して強く惹きつけられたことを示した Dutton & Aron (1974) の有名な研究も、これと同じタイプの誤帰属といえる。つまり吊り橋を渡る恐怖から生じた生理的喚起が、女性に対する感情から生じた喚起に加算された形となり、特に強度が増しているにもかかわらず、本人はそれを意識しないために女性の魅力が増強されて感じられるという形の誤帰属である。この研究の場合は、2種類の原因による生理的喚起は同時に存在しており、興奮転移理論が予測したような、先行刺激による興奮が後続の刺激への反応に影響を与える場面とはやや異なるが、同じカテゴリに分類することができる。これは第3のタイプの情動誤帰属といえる。

情動の帰属における推論の潜在性

Schachter の情動理論では、人間には自分の内的状態を評価し、それがどのような性質のものであるかを明確にしたいという欲求があると仮定しており、自分が感じている生理的喚起症状がなぜ生じたのかを推論し、その原因を情動関連の刺激の作用によるものと認知する場合に情動が生じると論じている。この理論の中で、Schachter 自身は帰属 (attribution) という用語を用いていないが、そのプロセスは、自己に対して適用された

情動帰属の過程であるとして、後に帰属理論の枠組みの中に組み入れられている。

ただしこの種の推論過程は、Heider（1958）に始まり、Jones & Davis（1965）、Kelley（1967）によって展開された初期の帰属理論で想定された帰属の推論に比べて、意識性・顕在性の点で大きく異なるものであると考えられる。初期の帰属理論では、意識的で合理的な情報収集活動と情報の比較考量に基づく因果推論が想定されていた。たとえば Kelley（1967）の分散分析（ANOVA）モデルでは、ある結果が起こったとき、その原因の候補を複数考え、それらが結果と共に変化するか否か、つまりその要因が存在するときには結果が生じ、存在しない時には結果が生じないような共変（covariation）関係があるかどうかをテストするというプロセスを仮定している。そしてそのテストのために、人を変えたり、対象を変えたり、時期を変えたりした場合に、結果が異なるかどうかの情報を収集するとしている。ここで想定されているのは、結果に対して「なぜ？」という疑問を提起し、それに関連した情報を計画的に収集するという、きわめて意識的なプロセスであり、意図的な原因究明の試みである。Jones & Davis（1965）の対応推論理論でもまた顕在的・意識的なプロセスが想定されている。この理論は対人認知における帰属過程を対象にしたものであるが、ここでは当該の行為が意図されたものであるか、そしてどのような意図に基づいたものであるかを手がかりにして、行為者の内的特性を推論する過程が理論化されている。行為者の意図の推定に際しては、行為者が行為を引き起こす能力をもち、その行為がある結果をもたらすという知識をもつことが前提とされ、その他に周囲の状況における外的な圧力や誘因などの有無、結果が社会的に望ましいものであるか否かの吟味などがなされると仮定される。ここで想定される推論過程も、何段階かの意識的な認知作用を伴うプロセスである。つまり初期の帰属理論においては、現象の原因に対する明示的な疑問提起と、意識的な情報収集および諸要因の比較検討や熟慮に基づく推論の過程が前提とされていたことができる。

これに対して、情動の帰属における推論は、より潜在的な性格のものといえる。生理的喚起状態そのものは、ある程度顕在的で意識されるものであるが、これに対して原因を問い、それに対する答を見つけるプロセスは、上記のような初期の帰属理論で想定された意識的で意図的なプロセスとはかなり性格の違うものと考えられる。この推論の潜在性については、最後のセクションで改めて考察する。

3. 認知的判断と誤帰属—近年の誤帰属研究

プライミング研究

1960-70年代以降、認知心理学的研究の発展は目覚ましいものがあったが、社会心理学における認知研究もその影響を受け、社会的場面、社会的刺激を対象にした認知過程に関する本格的な検討が始まった。

初期の研究の代表的なものとして、Higginsら（Higgins, Rholes, & Jones, 1977）の研究を挙げることができる。この研究では、第1の知覚課題で、スライドの背景色を答えるのと並行して単語を記憶させた後に、別の課題と称して、刺激人物の行動記述を読ませて評定を求めた。行動記述は、勇敢とも、むこうみずともとれる内容であったが、先行課題の記憶材料に「勇敢さ」と関連する単語が含まれていた条件では、「むこうみず」関連語が含まれていた条件よりも、評定は好意的になることが示された。これは対人認知におけるプライミング効果を示した先駆的な研究であった。

これに引き続きBargh & Pietromonaco (1982) は、閾下刺激を用いて同様のプライミング実験を行った。具体的には、“hostile”や“unkind”などの敵意関連語を含むリストを閾下で呈示した後、刺激人物の行動記述文を読ませて評定を求めた。閾下呈示されたのは、条件により、敵意関連語が0%、20%、80%の割合で含まれているリストであったが、この割合の違いによって、主人公の多義的な行動記述文に対する解釈が異なり、敵意語が80%含まれるリストを先行呈示された条件での評定値が最も否定

的であった。この研究では、閾下呈示された言語刺激は、「閃光」であると実験参加者には告げられ、また現実に再認実験での的中率は50%を超えないにも関わらず、その後の判断には影響が見られた。つまり本人が先行刺激に意識的に気づいていない場合であっても、プライミング効果がみられることが示されたことになる。

また Devine (1989) は、特性語ではなく、黒人を連想させる語を閾下で先行呈示することによって黒人ステレオタイプを活性化した後、Bargh & Pietromonaco (1982) で使われたのと同じ行動記述文を読ませた。先行呈示された刺激の中には、攻撃や敵意と関連する語は含まれていないにもかかわらず、黒人ステレオタイプ語の比率が大きい条件の方が、刺激人物をより敵意的であると評定する傾向が見られた。

このようにして始まったプライミング研究では、その後さまざまな側面に関する検討がなされ、先行課題で呈示された刺激は、認知的判断や感情のみならず、行動や目標にも影響を与えることが示されている。プライミング効果については、通常、先行刺激がある概念や感情などを活性化させ、接近可能性（アクセシビリティ）が高まって、後続の判断の際に用いられやすくなるという説明がなされ、誤帰属の観点から論じられることは少なかった。しかし接近可能性の高まりを生じた本来の原因が本人には不明確であり、それを後続の判断や行動に転化させているという点で、誤帰属と同種のメカニズムによるものであると考えられる。

最近、Loersh & Payne (2011) は、プライミングが効果をもつためには、誤帰属の段階が必要であるという説を提出している。彼らは、各種の認知判断に対するプライミング効果から、行動や目標のプライミングに至るまでの多数の先行研究をレビューした上で、それらが基本的には同様の構造をもつことに注目し、各種プライミングを総合的に説明するものとして、状況的推論モデル (Situating inference model) を構築した。それによると、第1段階として、先行刺激によって関連する情報や概念の接近可能性が増した後、第2段階で、それが状況内の何らかの対象に対する自分

自身の自然な反応であると誤帰属され、第3段階で、誤帰属された内容が、環境から与えられた最も顕現的な質問への答として利用される、という3段階が仮定されている。つまり、接近可能性が高まっただけでは不十分で、それを外部の原因ではなく、状況内の特定の対象に対する自分の反応であると誤帰属するという条件が、プライミング効果出現のためには必要であるというのである。Loersh & Payne (2012) では、この仮説を検証するために、内的帰属または外的帰属を促す教示を与える実験を実施し、プライミング効果が表れるのは、課題中に頭に浮かぶ考えを自分の内部へ帰属する場合だけであることを示している。

また感情プライミングに関しては、Payne ら (Payne, Cheng, Govorun, & Stewart, 2005) が、これを誤帰属と見る立場から研究を行い、新しい潜在的な測定法の提案を行っている。この研究では、まず乳児の写真のような快感情を引き起こす刺激、あるいはクモのような不快感情を引き起こす刺激を短時間（ただし閾下ではなく、視認可能な程度）呈示した後に、中性刺激と考えられる漢字を呈示して、図形としての漢字の快・不快を判断させた。すると、快刺激に続いて呈示された漢字は不快刺激に続いて呈示された漢字よりも、快であると判断される割合が高いという結果が得られた。さらにこの結果は、「先行呈示される写真が漢字に何らかのバイアスを与えるかもしれないが、その影響を受けないように」という警告を与えられていた条件の参加者でも、ほぼ同様に見られた。つまり、これは本人の意識的なコントロールの及ばない効果であることが示されたことになる。Payne らはこの現象を用いて、態度対象についての写真を先行プライム刺激として用い、それが後続の中性刺激に与える影響を測定することによって、その対象に対する態度を測定することを提案している。この手法は、感情誤帰属手続き（AMP：Affect misattribution procedure）と呼ばれ、潜在的な態度測定法として利用され始めている。

単純接触効果

認知心理学分野で誤帰属説が有力な説明とされている現象の代表格として、単純接触効果を挙げることができる。単純接触効果（mere exposure effect）とは、本来は中性的な刺激であっても、それに繰り返し接触していると好意が増すという現象であり、Zajonc（1968）以来、図形、絵画、人名、顔写真などさまざまな刺激を用いた研究が行われてきた。初期の研究では、閾上での刺激呈示を行っていたが、Kunst-Wilson & Zajonc は、刺激を閾下呈示した場合にも単純接触効果が見られることを示した（Kunst-Wilson & Zajonc, 1980）。具体的には、八角形を閾下で反復呈示した後に、呈示されていない別の八角形と対呈示し、どちらが好きかを尋ねたところ、反復呈示された八角形の方が選ばれる率は60%以上であった。ただし、2つの刺激のうち、どちらを前に見たかという質問に対する正解は50%以下であり、実験参加者は刺激を再認できないことが確認された。この研究以来、刺激を閾下呈示する実験も数多く行われるようになったが、1968年から1987年の間に行われた単純接触効果研究のメタ分析を行った Bornstein（1989）によれば、刺激を閾下呈示した場合の方が閾上呈示の場合よりも、むしろ単純接触効果が大きいという結果が得られている。これに基づいて Bornstein（1992）は、刺激に対する意識的な気づきが効果の発現を抑制すると論じ、そのため刺激の呈示自体に気づかない閾下呈示の方が効果が出やすいと説明している。そして、誤帰属説の立場から単純接触効果の解釈を行っている。ただし、閾下呈示の方が閾上呈示の場合よりも単純接触効果が出やすいという結論に関しては、疑問視する見方もあり（例、Fox & Burns, 1993）、また閾下呈示の場合には、従属変数としても潜在的な測度である IAT や GNAT を用いた場合には効果が検出されるものの、顕在的、意識的な評定尺度では効果が出にくいという指摘もある（例、川上・吉田、2010 など）。

単純接触効果については、Zajonc（1968）以来、さまざまな説明が提出されているが、その中で有力なものとして誤帰属説がある。刺激に繰り返

返し接触すると、その刺激の処理が容易になめらかになる。これは知覚的流暢性 (perceptual fluency) と呼ばれるが、これを本来の原因である反復接触ではなく、その刺激に対する好意に誤って帰属したために起こるのが単純接触効果だというのである。誤帰属説の有効性は、刺激が反復呈示されたことに気づいている程度が高いと、単純接触効果が出にくいという実験結果によって確かめられる。閾下単純接触効果は、刺激が反復呈示されたことに特に気づきにくい状況であるが、閾上の呈示であっても、呈示後の経過時間や提示方法によって、効果の大きさが異なることがメタ分析の結果から明らかになっている (Bornstein, 1987)。呈示後の経過時間が長いほど効果が出やすく、呈示時間は短い方が効果が大きく、また同一刺激のみを呈示する同質呈示よりも異なる刺激を含むリストの異質呈示の方が効果が生じやすいという研究結果は、反復呈示された刺激に対する気づきが少ないほど単純接触効果が生じやすいことを示しており、誤帰属説を支持するものである。また Bornstein & D'Agostino (1992) は、参加者の半数に、刺激が以前に閾下呈示されていたことを伝えたところ、通常のように呈示されたことを告げられていない条件に比べて、呈示刺激を好ましくないと判断した。これは、正しい情報を与えることによって、直接に誤帰属を妨げた操作ということができる。

なお知覚的流暢性の誤帰属説は、単純接触効果のみならず、有名性効果 (Jacoby et al., 1989) や真実性効果 (Begg, et al., 1992) などにも適用されている。

4. 誤帰属過程の顕在-潜在性

前にも述べたように、誤帰属の研究で扱われてきたような事象においては、従来の帰属研究で想定されてきたような推論過程に比べて、はるかに潜在的で無意識的な過程が関与していると考えられる。ここで改めて、誤帰属現象における顕在性-潜在性について整理してみたい。

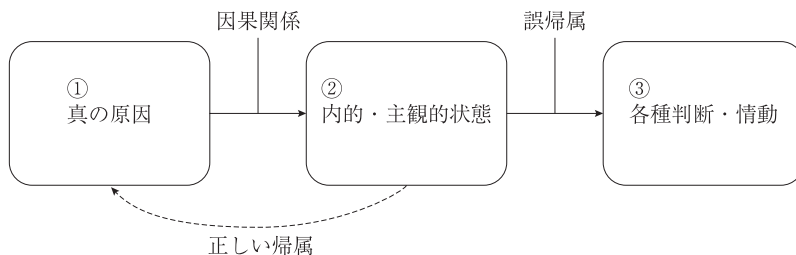


図2 誤帰属過程の流れ

誤帰属現象の一般形は、図2のように図示することができる。つまり真の原因①が存在し、現実の因果関係としては、その原因①がある種の内的・主観的状態②を生じる。これが誤帰属の対象となる生理的喚起や、既知感、知覚的流暢性などの主観的感觉である。この状態を本来の原因である①に帰属すれば正しい帰属になるが、誤帰属の生じる場面では、①から②への因果関係は認知できなかつたり、認知しにくい状況になっている。そのため、②の状態を経験している個人は、その原因を別の要因に帰属し、それが③の認知的判断や情動の形で表れる。これが誤帰属ということになる。以下の各要素についての、顕在-潜在性、意識性の問題を考えてみたい。

まず①真の原因であるであるが、情動の帰属の場合には、生理的喚起状態を引き起こす物質（例、エピネフリン）や身体的活動がこれに当たり、認知心理学系の誤帰属では、先行刺激（プライム）や単純接触効果における反復呈示刺激などがこれに該当する。上にも述べたように、そもそも真の原因が明瞭に認知されているならば、誤帰属は生じないはずであるから、この要素がある程度以上に潜在的であることは言を俟たない。ただし、原因として認知されないまでもその存在には気づいている場合（闕上呈示）と、存在さえも認識されない場合（闕下呈示）とがあり、①の要素の潜在性の程度は、個々の事例によって異なる。

続いて真の原因によって引き起こされた内的・主観的事象②であるが、これが帰属の対象となる。情動の帰属の場合には、生理的喚起状態であり、

認知的な誤帰属現象であれば、既知感や知覚的流暢性などの内的・主観的感覚に当たる。この要素は、情動帰属の場合には比較的顕在的であり、意識されやすいものであると思われるが、認知的判断関連ではそれほど明瞭ではないと思われるが、これは推測の域を出ない。ただし、たとえ明瞭に意識されないまでも、ある程度はこの要素に気づかなければ、それを説明するための推論は行われまいであろうから、誤帰属は生じないことになる。

さらに、①と②をつなぐものとして、真の原因である先行要因と内的状態との関係（因果関係）に気づいているか否かという側面も考慮する必要がある。誤帰属が生じる場合には、この関係の気づきは欠如しているのが通例である。プライミング実験では、プライム刺激自体が顕在化しているとしても、それが概念や感情を活性化し、接近可能性の増大をもたらしていることに実験参加者は気づいておらず、通常無関連な実験とされている、後続場面での判断に影響を及ぼしたとは思っていない。もしその関係に気づけば、プライミングの効果は見られないのが一般的である。また単純接触効果でも、反復呈示の効果で処理の流暢性が増していることに気づけば、刺激の好意度は増加しない。

そして誤帰属過程の最後の段階③は情動の経験や認知的判断である。これはほとんどの場合、顕在的かつ意識的であると考えられる。つまり、誤帰属過程は、潜在的・無自覚的過程に意識的解釈・説明を与えることができるということができる。ただし、実験において IAT や GNAT などのような潜在指標を用いて反応を測定する場合には、最終的な判断そのものも潜在的であるということになる。前にも述べたように、閾下単純接触の効果は、潜在指標を用いた場合には検出されやすいが、意識的な評定尺度では有意な結果が出ないことが多い。①の段階の刺激の顕在性-潜在性と③の段階の顕在性-潜在性には対応関係があるのではないかと推測されるが、これに関してはさらなる検討が必要である。

最後に、誤帰属の推論過程そのもの（②→③）は意識されているであろうか？ 実験参加者に何らかの推論を行ったか否かを直接尋ねても、肯定

的な答は得られないであろう。前にも述べたように、初期の帰属理論では、もっぱら顕在的で意識的・意図的な帰属の推論が検討されてきたのに対して、誤帰属における推論過程は、一般的に暗黙の潜在的プロセスであると考えられる。

誤帰属の過程は、真の因果関係が認知されない場合に、異なった対象にその原因を誤って帰属することにより、潜在的な過程に顕在的な説明を与える過程であると想定されるが、最終的な判断や情動に至る推論過程そのものはまた潜在的な性質を有すると考えられる。推論過程自体の意識性・顕在性の問題は実証的な検証に困難を伴うが、検討の意義がある研究課題である。

注

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 22530676）の交付を受けて行われた。

引用文献

- Bargh, J. A. & Pietromonaco, P. (1982). Automatic information processing and social perception: The influence of trait information presented outside of conscious awareness on impression formation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 437-449.
- Begg, J. M., Anas, A., & Farinacci, S. (1992). Dissociation of processes in belief: Source recollection, statement familiarity, and the illusion of truth. *Journal of Experimental Social Psychology: General*, **121**, 446-458.
- Bem, D. J. (1967). Self-perception: An alternative interpretation of cognitive dissonance phenomena. *Psychological Review*, **74**, 183-200.
- Bornstein, R. F. (1989). Exposure and affect: Overview and meta-analysis of research, 1968-1987. *Psychological Bulletin*, **106**, 265-289.
- Bornstein, R. F. (1992). Subliminal mere exposure effects. In R. F. Bornstein & T. S. Pittman (Eds.) *Perception without awareness*. New York, Guilford, Pp. 191-210.
- Bornstein, R. F. & D'Agostino, P. R. (1992). Stimulus recognition and the mere exposure effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 545-552.

- Devine, P. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 5–18.
- Dutton, D. G. & Aron, A. P. (1974). Some evidence for heightened sexual attraction under conditions of high anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 510–517.
- Dweck, C. S. (1975). The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 674–685.
- Fox, S. E., & Burns, D. J. (1993). The mere exposure effect for stimuli presented below recognition threshold: A failure to replicate. *Perceptual and Motor Skills*, **76**, 391–396.
- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York, Wiley.
- Higgins, E. T., Rholes, W. S., & Jones, C. R. (1977). Category accessibility and impression formation. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 141–154.
- Jacoby, L. L., Kelley, C. M., Brown, J., & Jasechko, J. (1989). Becoming famous overnight: Limits on the ability to avoid unconscious influences of the past. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 326–338.
- Jones, E. E. & Davis, K. E. (1965). From acts to dispositions: The attribution process in person perception. In Berkowitz (ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 2, New York, Academic Press.
- 川上直秋・吉田富二雄 (2010). 集団成員への閾下単純接触が集団間評価に及ぼす効果 — IAT を用いて 心理学研究, **81**, 364–372.
- Kelley, H. H. (1967). Attribution theory in social psychology, *Nebraska Symposium on Motivation*, **15**, 192–238.
- Kunst-Wilson, W. R., & Zajonc, R. B. (1980). Affective discrimination of stimuli that cannot be recognized. *Science*, **207**, 557–558.
- Loersch, C. & Payne, K. (2011). The situated inference model: An integrative account of the effect of primes on perception behavior, and motivation. *Perspectives on Psychological Science*, **6**, 234–252.
- Loersch, C. & Payne, K. (2012). On mental contamination: The role of (mis) attribution in behavior priming. *Social cognition*, **30**, 241–252.
- Payne, B. K., Cheng, C. M., Govorun, O., & Stewart, B. D. (2005). An inkblot for attitudes: Affect misattribution as implicit measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **89**, 277–293.
- Ross, L., Rodin, J., Zimbardo, P. G. (1969). Toward an attribution therapy:

- The reduction of fear through induced cognitive-emotional misattribution. *Journal of Personality and Social Psychology*, **12**, 279–288.
- Schachter, S. (1964). The interaction of cognitive and physiological determinants of emotional state. In L. Berkowitz (ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 1, New York, Academic Press.
- Schachter, S. & Singer, J. E. (1962). Cognitive, social, and physiological determinants of emotional state. *Psychological Review*, **69**, 379–399.
- Stoms, M. D., & Nisbett, R. D. (1970). Insomnia and the attribution process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 319–328.
- Zajonc, R. B. (1968). Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology Monograph*, **9**, 1–27.
- Zillmann, D. (1978). Attribution and misattribution of excitatory reactions. In J. H. Harvey, W. J. Ickes, & R. F. Kidd (Eds.), *New directions in attribution research*. Vol. 2, Hillsdale, N. J., Lawrence Erlbaum.
- Zillmann, D., Katcher, A. H., Milavsky B. (1972). Excitation transfer from physical exercise to subsequent aggressive behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, **8**, 247–259.